

シンガポールアート事情 ～シンガポールはアジアのアートハブになれるのか～

ART RESILIENCE
Director
松島 久美子



はじめに

筆者はアーティストとして東京、ニューヨークで、香港ではアーティストおよびコレクターとして活動してきた。夫の仕事の都合によりシンガポールに移転したのは2021年4月、2年9ヶ月前のことである。

シンガポールは、アジアの中でも経済発展を遂げ、文化的にもある一定の水準に達し、香港と似たようなところだろうという安易な仮定のもと暮らし始めたのだが、実際にはあらゆる意味で違うことがわかり、同時にシンガポールならではの魅力にも気づき始めたのだが、シンガポールのアートはどうなっているのか、がまず一番の関心事であった。

シンガポールに移転する前に住んでいた香港では“アート砂漠”から“世界第三のアート市場”へと香港が大変身するのを目の当たりにしていたのでシンガポールと香港との比較、にも興味があった。

本稿では、1.シンガポールのアート事情を1990年代末から現在に渡って俯瞰し、2.香港が“アート砂漠”から世界第三のアートマーケットへと成長した様子を振り返りシンガポールとの比較をし、3.最後にシンガポールはアジアのアートハブになれるのか？なれるとしたらどんな課題があるのかについて論じていきたい。

シンガポールにおけるアートの発展と現在

1996年にはシンガポール美術館がオープン。政府はシンガポールを世界のハブにするべく、主に経

済発展を促す要素としてアートを奨励することにした。シンガポール美術館は今では主に東南アジアの新しいアヴァンギャルドなアートを紹介している。

2000年にはシンガポールを、“国際文化芸術都市”とする政策（The Renaissance City Plan）が打ち出され、さらに国内の文化芸術振興が強化された。

2006年には“シンガポール・ビエンナーレ”の開催を開始、2011年には“アート・ステージ・シンガポール”というアート・フェアが開催された。2012年には政府系のEconomic Development Boardがアート部門への介入を開始、ギルマン・バラックスという東南アジア初のアート地区を作った。世界中から16のアート・ギャラリーが出店した。同時期にチャンギ国際空港の中に自由貿易区域“フリー・ポート”が建設された。



SAW オープニング・パーティ 2024

2013年からはシンガポール・アート・ウィーク（SAW）が始まる。これはナショナル・アーツ・カウンシルとシンガポール観光局が共同で開催するもので、筆者も今年SAWの一イベントとして個展を開かせていただいた。今年は1月19－28日までの

10日間に150以上ものアートイベントが行われ、アートSG、S.E.A. Focusとともにこの時期シンガポール中をアート一色に染めるのである。SAWでは展覧会のみならずパフォーマンス、トーク、ツアー、ウォーク、なども行われ、中でもナショナル・ギャラリーなどの外壁に照らし出されるプロジェクション・マッピング、Light to Night Festivalは誰でもが楽しめる没入型のイベントである。



Light To Night 2024

2015年にはナショナル・ギャラリーがオープン。シティホールと最高裁判所を改装したもので（日本の建設会社もその一部を担った）総面積64,000平米を誇り、東南アジアのアートのみならず、世界中の近現代アートを優れたキュレーションで見せてくれるシンガポールでも一二を争う素晴らしい美術館である。

2019年にはS.E.A.FocusというアートSGよりは小規模だがArt BaselとSTPI（版画のワークショップと広いギャラリーを擁する）が連携する東南アジアのギャラリー中心のアートフェアが開始。

2003年から2012年の間に文化系の会社の数は153から464へと増加。アート関係の収入は26億シンガポールドルから33億シンガポールドルへと飛躍した。

2023年にはアート・バーゼル香港のディレクターだったマグナス・レンフリューがアートSGを開始。レベルの高いアート作品を展示、海外からもコレクターや観客を動員している。写真はアートSGのVIPプログラムから2例を選んだ。



Chen Dongfanによる
ライブ・ペインティング



シンガポール若手アーティストの
筆頭株、Dawn Ngのスタジオ訪問

香港のアート事情～アート砂漠と呼ばれていた香港でいかにアートが盛んになりついには世界第三のアート市場になったか？～

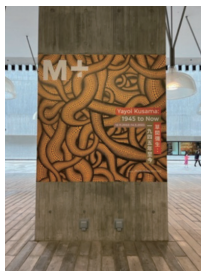
筆者が香港に移転した2009年、香港は“アート砂漠”と呼ばれていた。充実した美術館は少なく、大きなアートフェスティバルもなく、アートギャラリーもアンティーク店や昔からの画廊のみ、若いアーティスト達の活動の場も限られていた。当時はアートと言えば、香港美術館、香港ヘリテージ美術館、フォタン・アーティストヴィレッジ（2001年、筆者も一年だけアトリエを共同で持っていた。）しかなく、特に若いアーティストが認められる場や支援がほとんどない状態だった。

しかし筆者が住んだ2009年から2021年の12年の間に香港は目覚ましい変貌を遂げたのである。2011年世界でも最も重要なメガギャラリーの一つ、ガゴシアンギャラリーが香港支店をオープン。2012年同じくメガギャラリーのホワイトキューブ、ペロタンが香港支店を開設。2013年地元ギャラリー中心の香港インターナショナルアートフェア（2007－2012年）が世界で最も権威あるアートフェア、アートバーゼルに買収され、アートバーゼル香港が開始される。スイスのバーゼル、アメリカのマイアミに続き、アートバーゼルがアジアの拠点として香港を選んだという訳であり、つまりこのことは“香港がアジアのアートハブになった”ことを内外に示す大ニュースとなったのである。



Art Basel Hong Kong
2023

同年2013年には香港島南部のWong Chuk HangというエリアにSouth Island Cultural District (SICD) がスイス人のギャラリー (Art Statement) オーナー、ドミニクペレゴーによって設立され、いくつかのギャラリーとアーティストスタジオがメンバーとして参加、筆者もスタジオを持った。2014年には、香港島セントラルに元既婚の警察官の寄宿舎を改装したギャラリーを含むショッピングモール、PMQがオープン。昨年3月には筆者も個展を開かせていただいた。2016年にはこれまた香港島セントラルの元刑務所だった場所を改装してTaikwun (大館) というレストラン、バー、店舗、そして充実したコンテンポラリーアート美術館を擁する一大施設が開設された。2017年には、香港島セントラルの目抜き通り、Queens Road CentralにH Queens というビルが建ち、ギャラリーが大きな彫刻作品や絵画などを容易に持ち込めるようデザインされた特別仕様のビルで、メガギャラリーのPace, David Zwirner,日本のWhitestone (隈研吾デザイン) などがオープンした。そして2021年、長年待ち望まれていた中国政府主体のコンテンポラリー美術館M+が、ついに九龍半島側のWest Kowloon Cultural District内にオープン。



M+

この間、西欧世界は2008年のリーマン・ショックから傷を負い、期待の目をアジアに向けていた。アート・オークションの売り上げは次々に新記録を打ち立て、アジアの投資家がどんどんポートフォリオにアートを加えていった。2010年代初頭には中国でのアートセールスがそれまで市場を支配していたアメリカのセールスを超え、世界中のアート起業家達がアジアを新たな“黄金郷”とみなしたのだ。

シンガポールはアジアのアートハブになれるか？

さてこのように香港は2009年から2021年の間に“アート砂漠”から“世界の一大アートハブ”へと華麗な変身を遂げたわけだが、長年香港の競争相手と呼ばれてきたシンガポールはどうなのだろうか？香

港が先んじてアートハブの座を獲得したのだが、シンガポールはアートハブになれるのだろうか？ここからは香港とシンガポールの比較を行い、シンガポールがアートハブになる上での課題は何かを論じていきたい。

<香港とシンガポールの類似点>

香港もシンガポールも共に近年のアート市場グローバル化におけるキーセンターとなってきていた。すなわち世界の名だたるオークションハウス、アートギャラリー、アートフェアを数多く惹きつけてきた。両方ともM+やナショナル・ギャラリーという文化施設に多額の投資を行ない、一流の展覧会を開催し、世界中の美術館などと協力してきた。

また香港もシンガポールも多数派が中国系で元イギリス領植民地であったという意味で多くの共通点を共有する。両者ともに中国との歴史的な繋がりを持ち、冷戦時には西欧諸国側に属していたという事で都市型経済を形成してきた。両都市ともに20世紀後半には“アジアの虎”と呼ばれモノの生産拠点から金融や付加価値セクターの中心へと変貌してきた。

<香港とシンガポールの相違点から浮かび上がるシンガポールの課題>

シンガポールは、いくつかの重要な美術館を建てるなど政府主導のトップダウン方式でアートを盛り上げていこうとしてきた。ナショナル・ギャラリー然り、ギルマン・バラックス然り、シンガポール・アート・ウィーク (SAW) 然り。アート・ギャラリーなどを開く際には政府からの助成金があったという。しかしシンガポールにはコンテンポラリーアートを見たいという観衆が不足していた。美術館、ギャラリー、非営利団体のギャラリーなど立派な施設はたくさんあるが人が入らない。その一方、香港は民間によるプロジェクトでアートを盛んにしようという自由放任主義をとってきた。世界のメガ・ギャラリーの進出然り、アート・バーゼル香港開始然り、Tai Kwun (大館) 然り。そしてそこに巨額のチャイナ・マネーが流入し、香港アートウィークには世界中からたくさんのコレクターやアートディーラーが集まってくる。

2010年ごろ香港とシンガポールは世界のアート・マーケットとしてほぼ引き分け状態だったが、2015年には香港は9位、シンガポールは11位となり、2018年ごろには香港が俄然水を開けてきた。2018/19年にはアジアのコンテンポラリー・アート・マーケットの46%を香港が占めるまでとなった。世界のアート・セールスにおいてニューヨーク、ロンドンに次いで香港が第3位となり、実に2億6千万USドルという数字を上げたのである。

同時期シンガポールはアート・ステージ・シンガポールという2011年から始まっていたアートフェアが直前に中止となり、波紋を呼んだ。同アートフェアは2011年に出品ギャラリーは45、2016年には170と増えたが、2017年には131、それが2018年に84となり、減少傾向を辿っていた。こうしてコンテンポラリー・アートのセールスは前年から64%減のUS\$655,000となるなど香港と比べて著しく明暗を分けたのである。

香港では“Invest Hong Kong”という政府組織が、海外の投資家を惹きつけるために作られ、ネットワークや物流に関するアドバイスを提供したり、会計士、弁護士、ビザ・コンサルタントなどを紹介することにより、アート市場が自発的に盛り上がるのを促すようにしたというところにも、香港の自由主義的姿勢が見られる。

税制面では、香港には消費税がなく、アートの輸出入は無税であり、もちろんアート購入も無税ででき、大きなインセンティブとなる。このことが香港のアート・マーケット大躍進を支えてきたことは間違いない。一方、シンガポールには消費税があり、アートを購入する際にももちろん税金がかかる。

さて、香港が民間からの自発的アート産業振興を進めてきたのに対し、シンガポールでは、政府主導のトップダウン方式だということはすでに指摘したが、1985年の経済危機以降、アート政策が特に経済と深く結びつくようになってきた。1989年“the Report of the Advisory Council on Culture and the Arts”によって都市国家シンガポールの文化投資が明白に経済的根拠によって正当化されるようになった。当時の文化大臣、ジョージ・イェオは、“シンガポールは、アートを強力に発展させることによ

り、世界のハブ都市となる一助とするべきである。そしてアートの発展によって世界において競争力のあるモノやサービスを生産できるようにするべきだ。”と言っている。

どうやらシンガポール政府には“アートも経済的価値を生むべき、そうでなければ意味がない”という認識があるように感じられる。それを示す一つの例として、配偶者ビザを持つ者の就労条件、がある。すなわち配偶ビザを持つ外国人は会社または個人事業を設立し、シンガポール人または永住権を持つ外国人を一人雇い、最低3ヶ月給料とCPFを払わなければ就労（つまり経済的報酬を得る）することが許されていない。この規定はもちろん自国民保護が目的で作られたものだが、アーティストにも適用されるので、アーティストが絵や作品を売るためには会社または個人事業設立が必要で、ローカルまたは永住権を持つ外国人を一人雇用し給与とCPFを払わなければならないのである。

インテリア・デザイナーやグラフィック・デザイナー、ファッション・デザイナー、プロダクト・デザイナーなどの商業アーティストならばクライアントがあり、クライアントの要望に応えたデザインを作り、定期的に一定収入を得ることが比較的容易であるが、クライアントのために作品を作らないファイン・アーティスト（純粋芸術家）にとっては作品が売れるかどうかわからない、売れるとしてもいつ売れるかわからない、しかも個人でアート制作をする分には人を雇う必要性もないので、この規定は大変に厳しいルールである。

香港では多くの外国人がアーティストやアートギャラリーのオーナーやディレクターとして香港のアート業界を盛り上げてきた。シンガポールにも多くの外国人がアーティストやアート関係者として住んでいるが、この配偶者ビザ規定のために活動を諦めてしまっている人も少なくない。香港ではEast Meets Westと言われ西欧文化と東洋文化が出会い融合して新しいカルチャーを生み出し香港のアート界を盛り上げてきた。例えばインドネシアのケチャという民俗音楽がドイツ人画家、ヴァルター・シュピースが芸能化をすすめたことによって今日のような確立した男声合唱、舞踏劇に発展したことにも見られ

るように、地元民と外国人が等しく機会を与えられ、お互いに刺激を与え合い、協力して、新しいその国のカルチャーを作り上げ盛り上げていくという状況が理想的であり、現在のシンガポールのアート界では残念ながら外国人に与えられる機会というものがあるように不足しているような感があるのである。



シンガポールが誇る壁画家、Yip Yew Chong（元会計士）と彼の最近作品



チャイナタウンにある彼の作品

もう一つはやはりシンガポールのトップダウン方式と関連して、例えばアートのパフォーマンスなどにおいて少しでも過激な内容なものだと規制がかかったり禁止されたりする。これがアートステージ・シンガポールの出展ギャラリー数の減少の理由の一つであるらしい。また、シンガポールで最近流行っていると言われる壁画だが、他国ではGraffitiといい、地元のアーティストが自発的に壁に落書きをするのであるが、シンガポールの場合、Graffitiは基本的に禁止されている。なのでチャイナタウン、リトルインディア、アラブストリートなどに多く見られる壁画は、全部その周りの店や会社が発注してアーティストに描かせた絵なのだ。だから合法的で、良い子の絵である。街にアートが溢れている事は嬉しい事だが、アートというのは本来自由、アーティストが描きたいように描く、それが基本だとすれば、シンガポールの壁画は本来的なアートとはちょっと違った意味合いを持つことになる。

ただこうした課題もある一方、中国や香港が政治的に厳しい状況になってきたため、中国人富裕層、中国人コレクターがシンガポールに移転する傾向もここ数年顕著になってきており、そうした富裕層のファミリー・オフィスやコレクターがプライベート・ギャラリーをオープンしてきており、これから

はさらにコンテンポラリー・アートに対する注目が集まっていくのは確実だと言えよう。またここ数年ファンド会社など元々金融関係の会社、オフィスが“確実な投資先”としてアートに目をつけるようになってきており、中にはギャラリーをオープンしたり、ポップアップ展覧会を催したり、するケースも見られるようになってきた。

こうした最近のトレンドに加えてこれまでの課題に対して有効な解決策、改善策を見出すことができれば、必ずや近い将来シンガポールがアジアのアートハブになれる日が来ることであろう。時代の潮流は“アジア”だ。世界中の期待の目がアジアとアジアのアートに向けられている。

<参考文献>

1. South China Morning Post, Feb. 5th, 2024, “Singapore aims to be the No. 1 art market in Southeast Asia, and the recent growth in private art spaces and exhibitions could help it realise that ambition” by Paul Uttam
2. MDPI “Hong Kong as a Global Art Hub: Art Ecology and Sustainability of Asia’s Art Market Centre” by Zoran Poposki and Isaac Hok Bun Leung, Nov. 29, 2022
3. ART news JAPAN, Aug. 3rd 2022, “アート市場はシンガポールの時代が来る!? 香港脱出の富裕層を取り込み拡大中” by Reena Devi, Aug. 3rd 2022
4. MDPI “Becoming Asia’s Art Market Hub: Comparing Singapore and Hong Kong” by Jeremie Molho, Apr. 27th 2021
5. AsiaX 閉鎖感を打破！「アートのある暮らし」を身近にしたシンガポール市場開拓秘話, Mar. 15, 2021 by 舞スーリ、AsiaX編集部
6. 一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所「シンガポールの政策 文化・芸術編」Mar. 2020
7. AsiaX “シンガポールの国を挙げたアートタウン化計画に迫る” Mar. 27th 2019
8. Art Annual Online Oct. 17, 2014, [レポート] 2015年、シンガポールに2つの美術館が開館 by 橋爪勇介

執筆者氏名

松島 久美子（まつしま くみこ）

経歴

プラット・インスティテュート美術大学首席卒業。ミドルベリー・インスティテュート・オブ・インターナショナル・スタディーズ・アット・モンタレー卒業MBA取得。早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。香港アジア・ソサエティより油絵で受賞。現在シンガポール女性芸術家協会会員として各種グループ展、個展に出席している。

ウェブサイト：<https://www.kumikomatsushima.com>
インスタグラム：kumiko_matsushima_hk